

平成16年7月5日

小学校と中学校の接続関係を考える

- 6 - 3 制から 4 - 5 制への試行 -

調査対象児童・生徒数

	男子	女子	合計
小学校	629	607	1236
中学校	294	282	576

1 身体的成熟の視点から - 小学生高学年から顕著に見られる身体的個人差 -

身 長										体 重									
小学校		最大(cm)		最小(cm)		差(cm)		分散		小学校		最大(kg)		最小(kg)		差(kg)		分散	
		A小学校	B小学校	A小学校	B小学校	A小学校	B小学校	A小学校	B小学校			A小学校	B小学校	A小学校	B小学校	A小学校	B小学校	A小学校	B小学校
1年生	男	126.7	123.2	109.2	105.5	17.5	17.7	22.6	23.5	1年生	男	33.7	30.6	17.4	15.9	16.3	14.7	13.8	10.0
	女	126.5	123.6	106.5	104.6	20.0	19.0	28.3	20.2		女	25.6	28.0	15.0	16.5	10.6	11.5	7.5	7.7
2年生	男	138.2	130.1	112.2	113.4	26.0	16.7	21.2	20.7	2年生	男	38.1	34.1	17.8	18.7	20.3	15.4	17.4	15.1
	女	128.8	129.2	116.7	109.3	12.1	19.9	9.8	25.9		女	29.6	28.3	20.0	16.2	9.6	12.1	7.7	10.7
3年生	男	143.9	138.9	116.5	120.5	27.4	18.4	28.6	14.1	3年生	男	37.5	39.3	19.6	23.1	17.9	16.2	18.0	20.8
	女	146.1	139.6	120.1	118.7	26.0	20.9	31.1	27.1		女	46.5	39.0	21.2	20.0	25.3	19.0	27.9	17.3
4年生	男	139.4	146.8	123.9	121.4	15.5	25.4	22.5	32.0	4年生	男	50.2	57.3	24.1	22.2	26.1	35.1	61.6	65.6
	女	142.0	153.3	124.9	122.0	17.1	31.3	21.0	49.6		女	43.3	39.2	21.7	17.5	21.6	21.7	24.4	29.2
5年生	男	149.4	154.6	128.8	126.2	20.6	28.4	32.5	36.7	5年生	男	61.0	67.4	24.2	25.7	36.8	41.7	99.7	65.2
	女	155.9	151.3	132.7	129.4	23.2	21.9	32.2	30.6		女	46.2	53.0	29.2	23.7	17.0	29.3	20.6	43.2
6年生	男	172.6	155.9	134.3	133.6	38.3	22.3	65.0	25.0	6年生	男	70.6	59.3	33.3	28.0	37.3	31.3	89.0	92.5
	女	159.7	157.3	134.8	132.0	24.9	25.3	50.9	33.1		女	65.1	68.4	27.8	28.2	37.3	40.2	90.9	63.5
中学校		最大(cm)		最小(cm)		差(cm)		分散		中学校		最大(kg)		最小(kg)		差(kg)		分散	
		A中学校	B中学校	A中学校	B中学校	A中学校	B中学校	A中学校	B中学校			A中学校	B中学校	A中学校	B中学校	A中学校	B中学校	A中学校	B中学校
1年生	男	168.4	169.6	137.4	141.8	31.0	27.8	56.9	40.0	1年生	男	62.3	103.3	31.0	30.9	31.3	72.4	64.0	154.7
	女	165.5	166.0	139.4	130.0	26.1	36.0	42.5	38.5		女	63.5	67.8	27.5	26.0	36.0	41.8	54.6	67.4
2年生	男	176.1	178.5	145.8	146.7	30.3	31.8	50.5	36.3	2年生	男	106.0	93.0	34.5	34.2	71.5	58.8	185.2	108.0
	女	175.8	166.0	143.1	143.0	32.7	23.0	35.3	38.1		女	84.5	76.2	31.5	31.2	53.0	45.0	116.2	69.0
3年生	男	181.8	184.0	152.2	142.1	29.6	41.9	36.4	47.8	3年生	男	97.5	82.6	38.0	31.3	59.5	51.3	148.1	73.7
	女	168.5	174.1	144.6	147.5	23.9	26.6	25.1	27.5		女	75.0	70.8	41.0	35.2	34.0	35.6	56.4	52.2

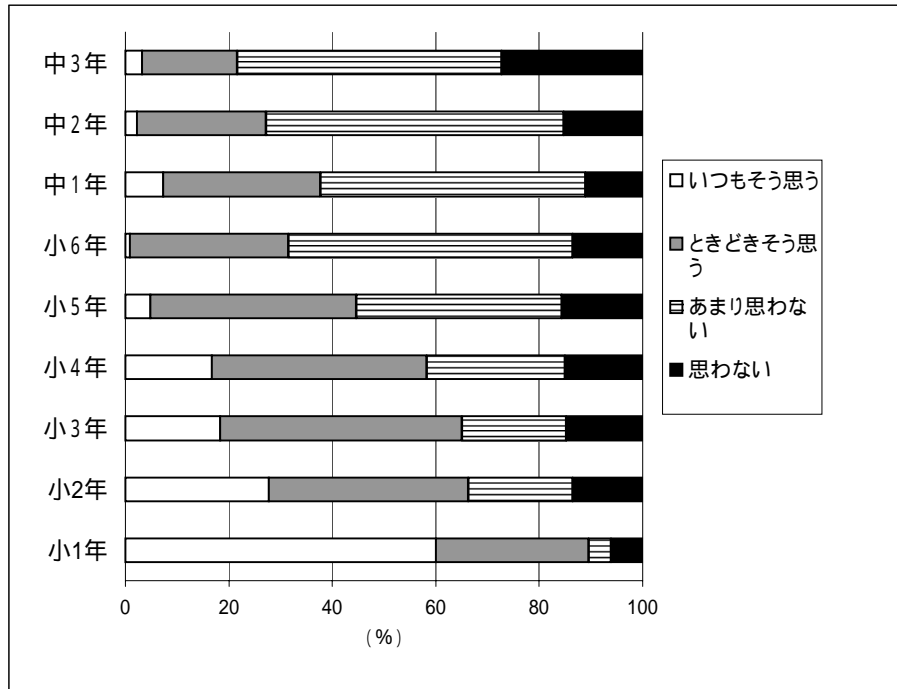
・最大値と最小値の差や「分散」（値のちばり具合）のデータを見ると、おおむね4～5年生くらいから身長及び体重における個人差が拡大している。

- ・中学2～3年生あたりから、その個人差は収束に向かう傾向が見られる。
- ・一般的な傾向として、5～6年生で半数以上が初潮の開始時期をむかえている。
- ・身長・体重及び初潮の時期から見て、5年生頃を境として子どもの身体的生理的な状況が大きく変わりだしており、このころからより一層個人差に応じた対応が必要であると思われる。

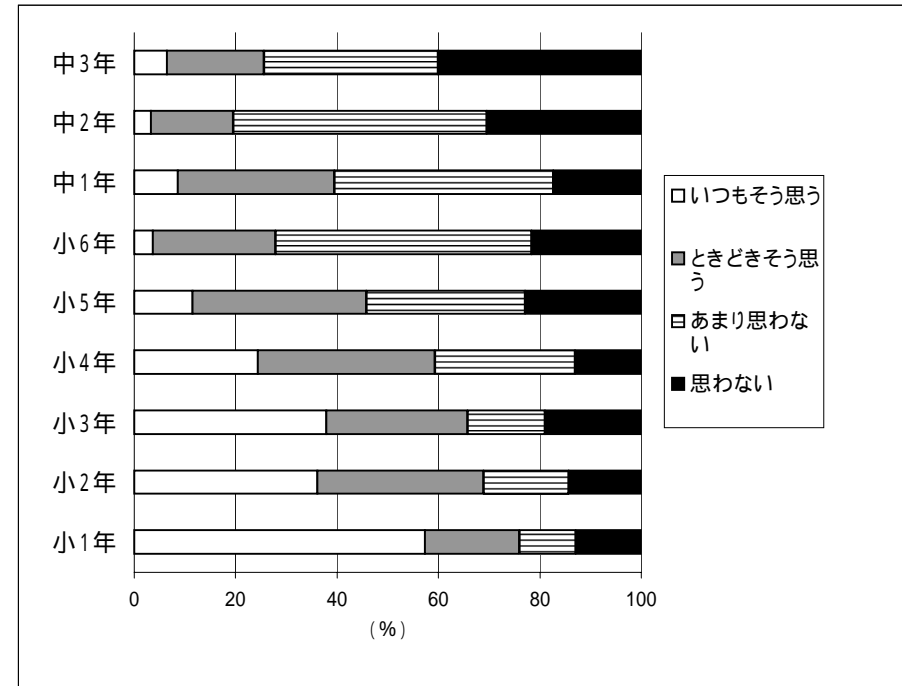
分散とは、集団の中での測定値の「ばらつき」の度合いを示す。例えばA小学校男子身長の分散値を比べると4年生で22.5、5年生で32.5となっており、この分散値が大きい5年生の方が「ばらつき」も大きいと判断できる。

2 知的発達段階の視点 - 「自己肯定」から「自己否定」への移行 -

「まわりの人から認められていると思いますか。」



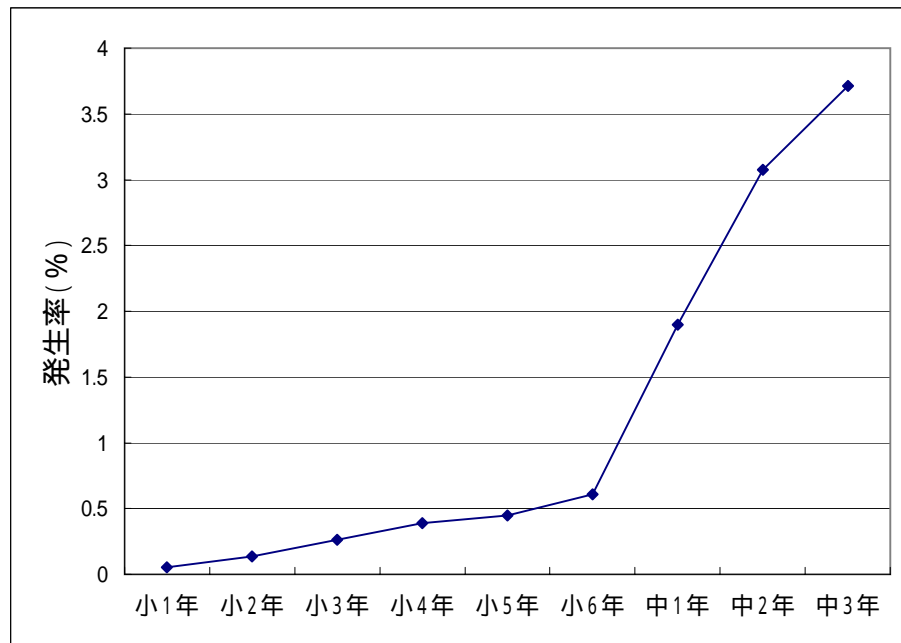
「あなたは自分のことが好きですか。」



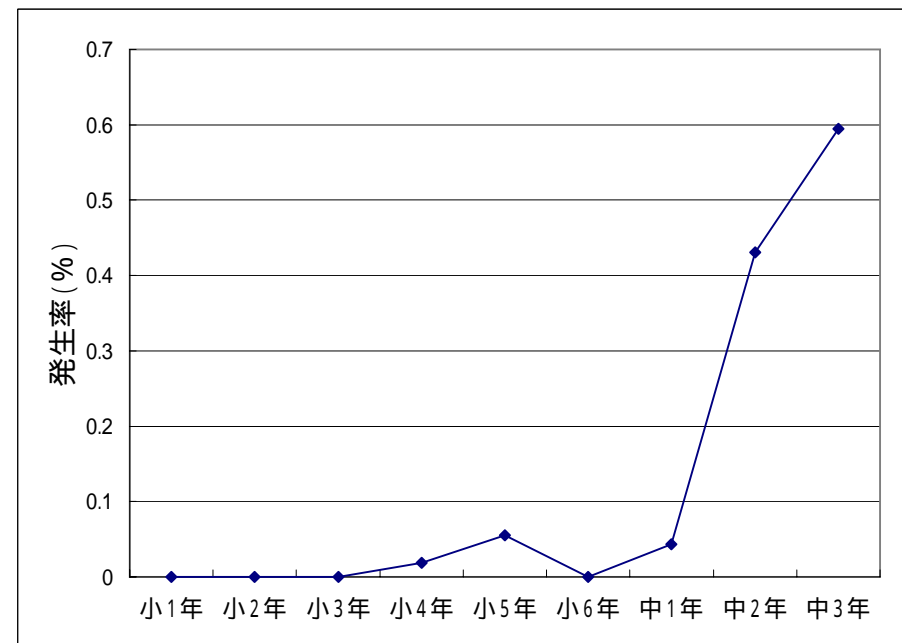
- ・「いつもそう思う」「ときどきそう思う」の肯定的に考えている割合は、全体的に学年が上がるにつれ少なくなっている。
- ・「まわりの人から認められているか」の問いに対して「いつもそう思う」と強く肯定している割合が4年生は16.7%、5年生では4.9%となっている。また「自分のことが好きですか」の問いについても4年生は24.4%、5年生では11.5%となっており、4年生と5年生との間には他の学年間よりも大きな落差が見られる。
- ・これらの調査から、「肯定的な自己認知」や「自尊感情」が人格の成長にともなって、5年生頃から急に低くなっていると予測できる。また、自分自身を肯定的にとらえることが難しくなり、自分の長所や可能性が見いだせなくなったり、「自分を価値の低いもの、社会的に認められないもの」という見方をしたりしていることが考えられる。こうした状態のままでも中学2・3年生をむかえることになるため、自らが判断・選択し、自己決定する力の育成が困難になっていると考えられる。
- ・こうした状況から考え、特に5年生以降中学校にかけて、4年生までとは異なった指導（外発的動機よりも内発的動機づけの重視、丁寧な個別指導や自分の価値を伸ばす学習等）の充実が必要である。

3 生徒指導上の視点 - 5年生以後に対する児童観・指導観の変革の必要性 -

学年別不登校発生率（品川区全体）



学年別問題行動発生率（品川区全体）



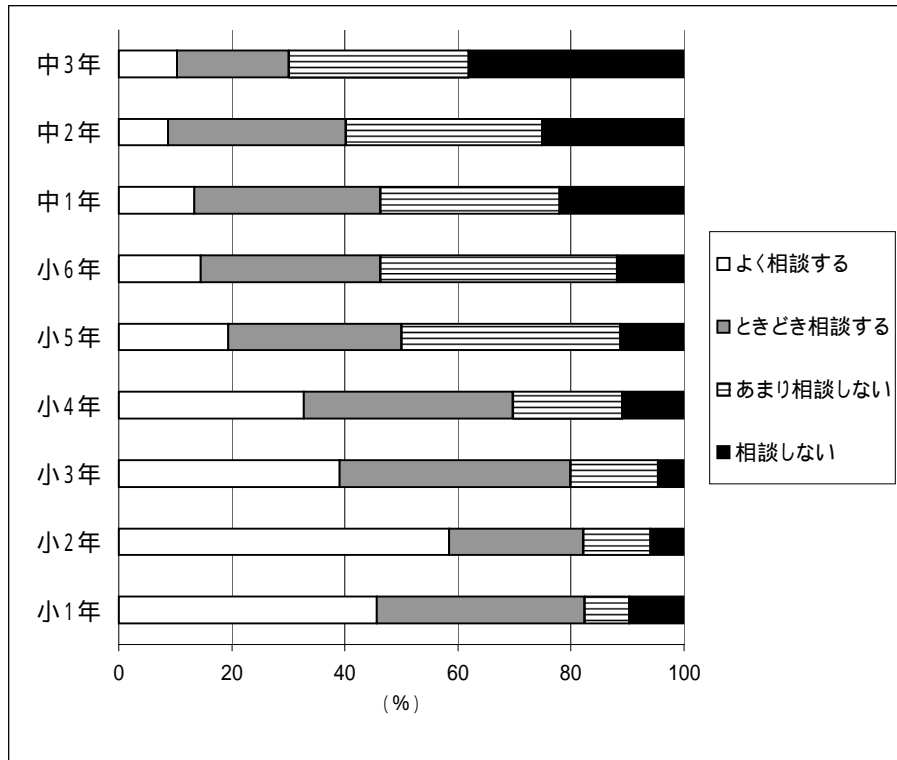
・不登校の発生率は、6年生は0.61%に対して中学1年生は1.90%となっており、6年生から中学1年生にかけて大きく上昇している。また、問題行動発生率についても、中学1年生では0.04%であるが中学2年生では0.43%、中学3年生では0.59%となっており、中学2・3年生の発生率がそれ以前と比べて急増している。

・このことから、不登校や問題行動の発生は、小学校から中学校にかけて、例えば指導形態や教師とのかかわり方、学習内容の量や質など、教育環境が著しく変わることが一つの要因であると考えられる。

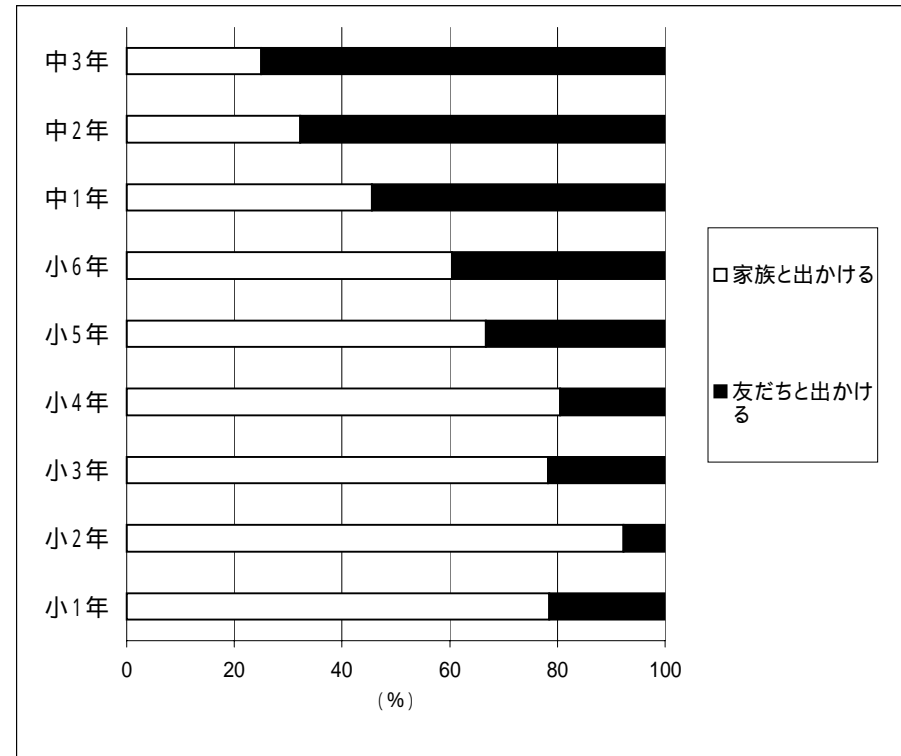
・不登校及び問題行動とも中学2年生での発生率が著しく高くなっており、それ以前に潜在化していた諸問題等が表面化してきたものと考えられる。したがって、わずかにしる5年生頃から問題行動の兆候が見られる状況から、特にこの時期（5年生～中学1年生）については、発達段階に応じて継続的・系統的に教育環境を整えていくことが必要である。

・また、小学校の指導においては、小学校6年間を画一的・一律的に考えるのではなく、1～4年生までと5年生以降の指導の在り方（児童観と指導観）を変えていくことが重要である。

「困ったことがあるとき、家族の人に相談しますか。」



「休日に家族と出かけることと友だちと出かけることとどちらを選びますか。」



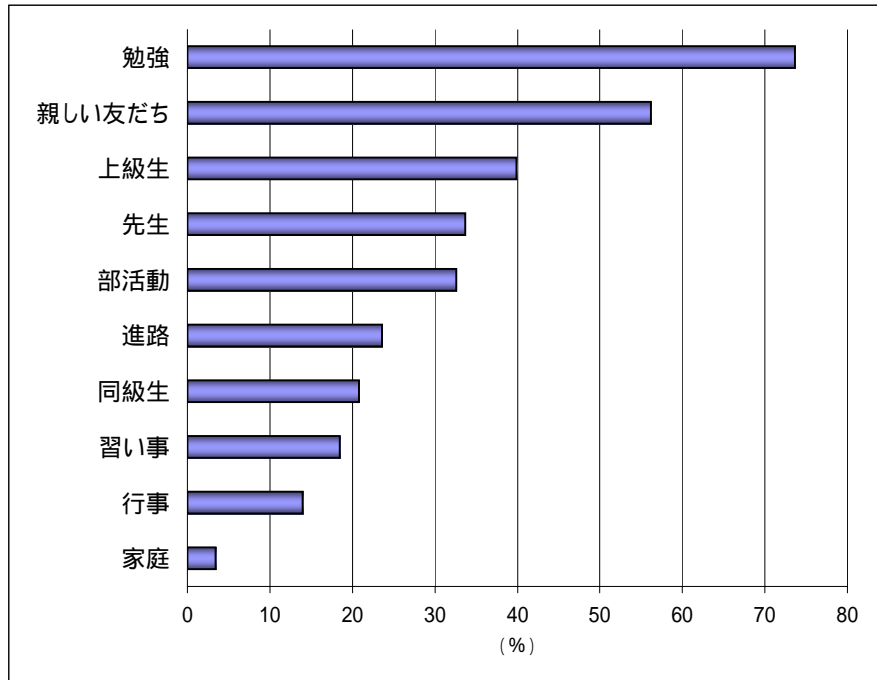
・この2つの調査結果から、「家族の人に相談する」「休日に家族と出かける」子どもの割合が、学年が上がるにつれ少なくなっていることがある。特に、家の人によく相談する割合が4年生は32.8%に対して5年生では19.4%、また、休日家族と出かける割合は4年生は80.5%で、5年生は66.7%となっており、4～5年生にかけてその傾向が他の学年と比べて顕著となっている。

・この頃から、友だちの方に関心が大きくなり、いわゆる「親離れ」の芽が出てきており、「自分をより客観的にみつめていても、親や家族への依存はまだ必要」と感じているという矛盾した状況におかれている。

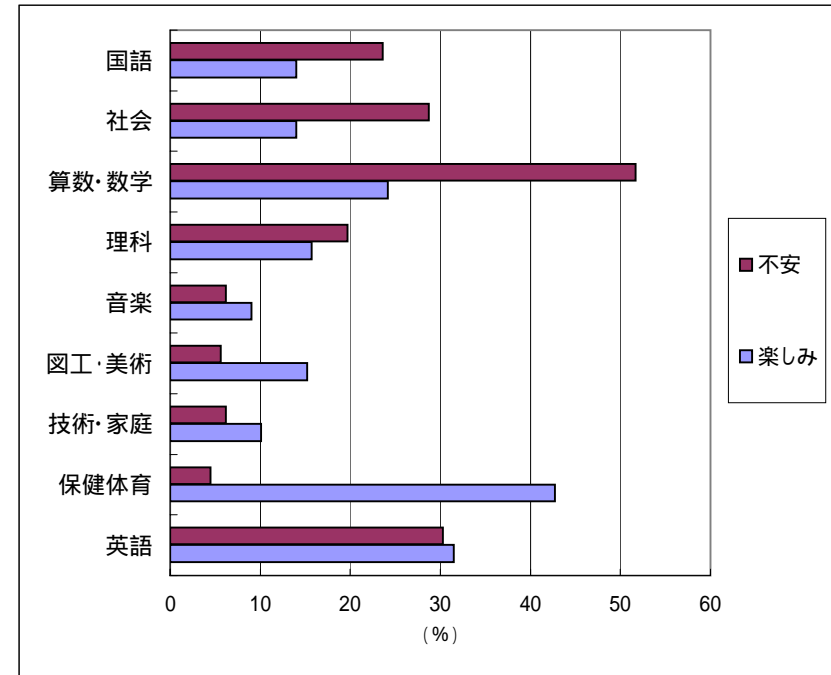
・こうした子どもの心理的不安定な状況に対して、子どもと教師との人間関係や信頼関係の継続性・一貫性を重視した指導を行うなど、小学校から中学校にかけて一貫した教育によるスムーズな移行を実現することで、子どもたちが楽しく安心して学べる学校生活を送ることができると思われる。

4 小学校と中学校の接続 - 小学校から中学校へのスムーズな移行のための要因 -

「不安や心配を感じていたことは何ですか。」



「楽しみにしていた教科と不安に思っていた教科は何ですか。」



・小学校から中学校へ入学する前の不安について、多くの子どもたちが「勉強」であると答えている。（全体の73.6%）

・「勉強」の中で、「不安」の方が「楽しみ」より多いのは国語、社会、数学、理科であり、特に数学は「不安」が「楽しみ」をほぼ2倍上回っている。一方、「楽しみ」の方が多いのが音楽、美術、技術・家庭、保健体育であり、保健体育は圧倒的に「楽しみ」の方が上回っている。

・「不安」に思っている教科の中で割合が高かったのは数学である。既習の学習内容を活用することで新しい学習内容を習得していく数学は、基礎・基本となる学習内容が十分に身に付いていないと新しい内容を学習することが難しい教科である。また、小学校では具体的操作が多かったのに比べ中学校では抽象的操作が中心となるため、抽象的な思考への移行がうまくできない児童・生徒も多くおり、中学校での学習に不安を抱いているのではないかと考えられる。

・数学以外にも、「積み上げ」の必要な教科（国語、社会、理科）において、「小学校の時とどう違うのか、違っていたらどうしよう」との不安が強くなっていることが結果として表れており、小学校と中学校が接続する部分のカリキュラムをなめらかにするとともに、小学校の段階から教科担任制を導入したり中学校の教員から指導を受けたりしながら、中学校での学習に対する不安をできるだけ取り除く指導内容・方法を工夫していくことが大切と思われる。